

在日外国人青年の母語認識と自己認識の発達と形成

－ 2 人の若者のライフストーリーから－

佐藤美奈子(国立民族学博物館)

1. はじめに－研究の概要

本研究では、「ニューカマー」と呼ばれる外国人移住者の子どもとして来日し、日本の外国人受け入れ校で高校時代を送った2人の女性のライフストーリーを取り上げ、欧州評議会が提唱する複言語主義 (Coste, et.al.2009) と、文化人類学の一分野として発展してきた言語社会化論 (Ochs and Schieffelin 2012) を理論的枠組みとして分析する。複数の母語定義基準を提唱する Skutnabb-kangas (1981) と、関係言語の相対的地位から言語の「優位性」の概念を提唱する Weinreich (1976) の見解を融合し、Grosjean (2008) の「ホリスティックな視点」から、複数の言語をもつ複言語話者の言語能力と生活と人生を共時的に、また通時的にとらえる。それにより、彼女たちが自身の複数の言語をどのように認識し、その言語認識が彼女たちの自己認識や自身の置かれた現状に対する認識にどのように関係しているかを明らかにする。

2. 研究の背景－「ニューカマー」の急増とA市

1970年代から1980年代にかけ、フィリピンや南アジア、南米諸国からの日系人等、「ニューカマー」と呼ばれる出稼ぎ労働者の来日するようになった。1990年の「出入国管理及び難民認定法」改正により、その数はさらに急増した(西原,杉本 2021: 60-61)。法務省出入国在留管理庁統計(2020年末)外国人入国者数は430万9922人、在留外国人数は288万6021人である。本研究が対象とする外国人受け入れ高校X高は、A市に位置する高校である。A市は、国勢調査基本単位レベルでみた外国人集住地区数として全国でも上位にあることで知られる都市である。また、集住地区に居住する外国人の割合も高く、市の南西部に位置するB地区は、特にブラジル人の割合が高いことで知られ、ブラジル人集住地区となっている。一方、市の北東部に位置するC地区は、B地区ほどではないものの、中国人とフィリピン人の割合が高く、中国人とフィリピン人の集住地区となっている。X高はB地区にあり、インフォーマント2人もB地区在住である。

3. 本研究の目的と着眼点

本研究の目的は、第1に、青年期から若い成人期の複言語話者の言語認識を、特に、言語アイデンティティとその基盤となる言語の定義に着目して明らかにすることである。第2は、移動する若い複言語話者の言語社会化と、その過程における彼らの複数の言語の関わりを明らかにすることである。これらの考察において本研究が着目するのは、複数の言語間における英語の位相と、インフォーマント2人の年齢、すなわち彼女たちは今、高校を卒業し実社会へ出ようという決断の時期にあるということである。第1に英語について、「移動する子ども」(川上 2010, 他)は、出身国へ戻ったり、あるいは第3国へ渡ったり、とその後移動していく可能性が高いといわれる(川上 2010)。彼女たちにとって、英語は、第一言語(ネパール語、ポルトガル語)と移住社会の言語(日本語)という2つの言語に加え、学校教育を通して生活の主軸のひとつとなってきた言語である。さらに彼女たちが今後も移動していく可能性が高い青年たちであることを考慮したとき、世界言語である英語が高い実用的価値をもつことは明らかである。加えて、日本社会は、日本語が高い実用的機能を担う一方で、威信性という意味では英語が日本語と並ぶ高い価値をもつ社会でもある(山本 2013)。移動を想定した将来設計と日本社会の暗黙の「言語ヒエラルキー構造」のなかで、彼女たちは複数の言語のなかで英語をどのように位置づけてきたか、実用面と精神面双方から着目する。

第2に彼女たちの年齢について、日本在住の、外国につながりをもつ子どもたちの問題は、これまで学校教育におけるマイノリティ教育問題と関連して取り上げられることが多かった。そのため初等教育を中心とする日本語指導や日本での生活への適応指導の方法的模索や制度的改善が研究の焦点とされ、言語的にも現在の居住社会の言語である日本語と、子どもたちの本国の言語(継承語)の2つを軸とする傾向があった(志水 2000; Ogbu 2000; 堀家 2010)。近年、大人となった「かつての移動する子ども」が、自身の移動の人生と複数の言語環境で育った経験を振りかえり、「語り」を通し

て再構築する(谷口 2000) 過程に着目する研究が発表されつつある(川上 2010, 谷口 2005, 2010, 他). しかしながら, その狭間で「子どもでもなく, 大人でもない」過渡期の青年たちは, 研究の対象から抜け落ちてきた. 彼らは, もはや親に連れられて移動するしかなかった子どもではない. かといえ, まだ, 自身が経てきた過程を振りかえるほどの地点には到達していない. 本研究が対象とするのは, 今まさに学校社会から実社会へと踏み出し, 自分の道を模索しようとする, 過渡期の青年たちであり, 「これまで」と「今」と, とりわけ「これから」を見つめる視線が, 彼女たちの言語認識にどのように関わってくるのか, 日本語と継承語と英語という3つの言語を軸に考察する.

4. 分析概念と先行研究

本研究では, 複言語話者の「母語認識」と「言語アイデンティティ」を分析概念とする.

4.1 「母語」の定義と, 母語を定義する過程とその意味をめぐる考察

Skutnabb-Kangas (1981: 18) は, 「母語とは何か」「母語を定義することはなぜ大切か」と問い, 母語を定義する複数の基準として, 第一言語, 言語能力, 使用頻度, 心的態度 (attitudes) (「内的同一性 (internal identification)」と「外的同一性 (external identification)」) を提唱した. 近年, 世界的な人の移動が活発化し, 個人と民族的, 国家的帰属の関係が複層的になるなか, Skutnabb-Kangas (1981) の複数の基準による母語定義を理論的枠組みとして多言語社会や複言語話者の言語認識やアイデンティティの形成を考察する研究が相次いで報告されている. Ying-Ying Tan (2014) は, シンガポールの若者を対象に, 民族の言語とは別に英語を新たなアイデンティティの基盤として育つ世代を描写した. そして共時的な視点から現在の若者における複層的な言語アイデンティティに着目する. 通時的視点からは, 鄭 (2011, 2014) が中国朝鮮族を対象とし, 中国朝鮮族日本語学習者の言語意識をライフストーリーから考察した. その結果, 「母語」「母国語」「外国語」をめぐる葛藤やアイデンティティの揺れを認め, 言語の境界を生きる者にとって「境界」とは「乗り越えていく」ものではなく, そこに「生きること」として考える必要があると提唱する. 松尾 (2008) は, 日本の植民地時代の台湾における日本語学習者を対象とし, 「母語」はひとつではなく, 生涯を通じて時代により変わり得ることを明らかにした(松尾 2008: 482).

4.2 「アイデンティティ」という概念

「アイデンティティ」という概念については, どの視点から, どの側面に焦点を当てるか, どのような方法でアプローチするかによりさまざまな捉え方が提唱されている. 本研究では, 第1に, 「アイデンティティ」を捉える視点として, 主に心理学領域で対象としてきた「個人アイデンティティ」に着目する. 第2に, アイデンティティの側面としては, アイデンティティの言語に結びつく側面として「言語アイデンティティ」を対象とする. 最後にアイデンティティへのアプローチの仕方という点からは, 本研究でインフォーマントから得られたアイデンティティは, ナラティブ・アプローチに基づく「ナラティブ (物語) ・アイデンティティ」(谷口 2013: 45) と呼ばれるものである.

(1) 「個人的アイデンティティ」

在日外国人およびその子どもたちを対象とした先行研究では, 各々のマイノリティ集団にユニークな「エスニック・アイデンティティ」に着目することが多かった. それは, 自らが主体的に選択するものではないという意味で「属性的なアイデンティティ」(Phinney & Rosenthal 1992: 149) とする見解や, 集団を維持する「主観的アイデンティティ」(Devos 1995: 25), あるいは「われわれ感覚 (we-feeling)」や「所属感 (belonging)」と関連した「集団的アイデンティティ」(Ogbu 2000: 417) と呼ばれ (Ogbu 2000: 417), 集団ごとの類型化や対応の根拠として説明されてきた. しかしながら, 本研究のインフォーマントからは, むしろそうした民族で「一括り」(堀家 2010: 52) した, 「期待される民族役割」から解放され, 「脱マイノリティ・非マジョリティ」(金 1999) の境界に生きることに心地よさや「自分」を見い出そうとする姿勢が読み取れた. 彼女たちは, 日本社会でマイノリティとして生きてきた親世代がエスニック・アイデンティティを強くもち, 集住して暮らし, 民族としてのアイデンティティを互いに確認し合うことで「自分たち」を維持してきていることを鋭敏に感じ取っている. 同時に, それが日本人住民との軋轢を招いていることも知っている (『Familia 保見団地』2018). 本研究では, ニューカマーの子どもとして来日した彼女たちが, 移民二世あるいは三世として, 自身を取り囲む卑近な集団としてのマイノリティ集団と, より大きな日本社会というマジョリティ集団の間で, 「個人」としてどこに自身の立ち位置を見い出そうとしているか, 所与のアイデンティティではなく自ら選択し, 獲得するアイデンティティとして, 「個人的アイデンティティ」(Erikson 1986: 127; Grotevant 1992: 73) を模索する過程に着目する.

(2) 「言語アイデンティティ」

アイデンティティにはさまざまな側面があるなか, とりわけ言語と結びつく側面を, 「言語アイデンティティ」(河原 2004: 181) と呼ぶ. 言語には, 他人に何かを伝達する「実用的機能 (practical function)」(河原 2004: 193) に加え, 自分が何者であるかを確認する「自己確認機能 (identifying function)」(河原 2004: 193) がある. 「言語アイデンティティ」

は、「言語によって確認された自己」(河原 2004 : 181) であり、後者の機能と重なるものである。ただし、複言語話者の場合、「ある人がある言語を自分自身の主要な言語と考えること (bilingual identification)」と、その人の言語能力や生活における使用頻度は必ずしも一致しない(小野原 2004 : 26)。そのため、「言語アイデンティティ」の考察に際しては、「自分がある言語を自分の言語と認めるかどうか」(内的同一性)ということと、「他者がある人がある言語の母語話者として認めるかどうか」(外的同一性)(松尾, 他 2008 : 468) に相違が生じることがある(Norton 2000 ; Skutnabb-Kangas and Phillipson 1989 ; Skutnabb-Kangas 1981 ; YingYing 2014 ; 松尾, 他 2008 ; 鄭 2011, 2013, 2014)。本研究の調査では、若者たちが、周囲から既定される、あるいは期待されるアイデンティティ (外的同一性) からの解放を求め、あえて、それとは異なる方向へ自己の内的なアイデンティティを形成していこうとする傾向が観察された。

(3) 「ナラティブ・アイデンティティ」

「ナラティブ・アプローチとは、ナラティブ (物語) という準拠枠を用いて、当事者の視点から経験の意味を解釈することを重視する質的研究の一分野である (Bruner 1986 ; Clandinin & Connelly 2000 ; Polkinghorne 1988 ; 山田 2007 ; Taniguchi 2009 ; 谷口 2013, 他)。ナラティブは「人々が自分の経験を言語化し、経験の意味を理解するための媒体である」(谷口 2013 : 45)。本研究の2人のインフォーマントと調査者は、彼女たちが高校3年生の秋から翌年の春、3月に卒業するまで、幾度となく話す機会をもって来た。卒業までの半年間は、進路についての家庭での話し合いや学校での保護者面談が繰り返しおこなわれ、そのたびに彼女たちの気持ちは大きく揺れた。そして彼女たちは、調査者に「ねえねえ、この前のことだけど、やっぱり考えてみたら……」と、新たな状況の進展や心境の変化を報告した。彼女たちは、調査者を相手に語り、語り直す過程を繰り返すなかで、自分の状況や認識を確認し、「わたしの物語」を構築していった。

4.3 言語社会化とアイデンティティをめぐる先行研究

言語社会化論の立場から、移民の言語社会化とアイデンティティの関係についても新たな研究が発表されつつある。Norton (2000) は、社会化に伴う言語アイデンティティの可変性に着目し、カナダに移住した直後の4人の移民女性の言語習得の過程をナラティブの言説をもとに考察した。「アイデンティティは一貫したものではなく、多様で矛盾に満ちたものであること」(Norton 2000 : 125)、さらにその時どきの状況において共時的にも通時的にも変化するものであることを明らかにした。河原 (2004) は、在日フィリピン人女性へのインタビューを通し、その言語アイデンティティが複数の言語と出会い、学んでいく過程で、「分裂」(河原 2004 : 186)し、同時に統合へと向かう過程を経て「多元的言語アイデンティティ」(河原 2004 : 186)を形成していくことを指摘した。

5. 方法

本研究は、エスノグラフィーとライフストーリーの2つの方法を融合させる。調査は、大きく2つの過程から構成される。第1は、高校3年生となったインフォーマントを対象に5月から10月にかけておこなった半構造化インタビュー調査である。Skutnabb-Kangas (1981)の複数の母語定義基準を参考に、① 習得順序 (第一言語, 第二言語, その他), ② 言語能力 (各々の第一言語, 日本語, 英語についての, 読む・書く, 話す・聞く, 総合能力に関する当人の「能力観」), ③ 使用状況 (家庭・地域社会, 学校といったドメイン別, 対話者別の「使用観」), ④ 情緒的絆, ⑤ 言語アイデンティティ (内的同一性と外的同一性, および両者の相違), についてたずねた。第2は、第1のインタビュー調査の回答結果についてのフォローアップ調査も兼ねて、翌年の3月の卒業までの半年間にわたりおこなったライフストーリーインタビューである。学校以外の場での彼女たちの現在の言語使用に、幼い頃からの言語遍歴も加え、共時的視点と通時的視点の双方から若い複言語話者が日本社会や居住地の言語状況をどのように捉えているか、そのなかでの自分自身の複数の言語と、それらを使い分けることで暮らす自分自身をどのように意識してきたかの言語観と自己観をたずねた。本発表では、第1の半構造化インタビュー調査の結果と、第2のライフストーリーインタビューを中心に、さらに卒業後のやり取りのなかで得た近況も交え、若い複言語話者の、歩み出したばかりの「人生史」(Coste, et.al. 2009)を、当人の語りから考察する。各々の「継承語 (第一言語)」と移住先の社会の言語(日本語)という2つの言語軸に、国際言語としての英語がどのように関わり、彼女たちの言語認識と卒業後の進路選択に影響を与えたかに着目する。

6. 考察

彼女たちの語りから、特に英語との関わりに関係して言及された部分に着目してみたい。

6.1 「弱い」第一言語と「言語アイデンティティ」の新たな基盤としての英語—MAI

MAI は、ネパール出身で、母親が日本人と再婚したことから13歳のときに母親と一緒に来日した。ネパールでは英語を教授言語とする小学校に通っていた。観光業に従事する実父は英語が得意で、MAIの英語習得を強く期待して

いた。「ネパールでも、ネパール語は英語よりも弱いと思っていたけど、日本にきてネパール語は、本当にダメなんだな、ってすごく実感した」という。来日し、母親は MAI と 2 人のときにはネパール語で話す、継父や継母との間に生まれた妹と一緒にいるときは日本語を用いる。「母は、わたしにはネパール語を維持してほしいんです」。MAI は、インタビューで、「情緒的な絆」という点ではネパール語を回答したが、日本での生活やこれからを考えたとき「自分を支えてくれるのは英語」と述べた。そして、「言語アイデンティティ」の基盤となる言語として英語を回答した。

6.2 モラトリアムの言語、将来の担保としての英語—AMI

両親ともにブラジル人の AMI は、「どうしてもわたしが日本に来ることになったのか、どうしても納得できなかった」という。それでも日本語検定 1 級に合格するほど日本語の学習に取り組んだ。「ちゃんとこの人として暮らしたいから。」しかしながら、色白で巻き毛の AMI の外見はいかにも「外国人」であり、「誰もわたしに日本語を話すことを期待しない」という。両親は、「すぐに帰るから」と日本語を覚える気はない。高校 2 年生のとき、AMI は、英語スピーチコンテストに学校代表で出場することになった。その際、「外国人だから英語ができる」と日本人生徒にいわれたことにショックを受けた。「わたしにとって英語は、日本人の子が英語を勉強するのと同じなのに」、「要するに日本人じゃない、ってこと」。「外国人」としてひと括りされている自分を感じた。その一方で、「それならそれでもいいかな」と思ったという。「卒業したらブラジルに一人で帰る、その後はわからない」。AMI にとって英語は、どこで生きていくか不確定の「モラトリアムの言語」であり、それがあればどこでも生きていける「担保の言語」としてある。

7. 結論

複言語話者にとって自己の複数の言語とは、共時的視点からは「無差別雑多な総体」(Weinreich 1974)である。モノリンガルが 1 つの言語で賄う機能を、複言語話者の場合は、複数の言語が各々の「部分能力」(Coste, et.al.2009)を「相補的」(Grosjean 2008)に提供し、協働しながらすべての必要を網羅している。一方、通時的視点からは、「流動的な総体」(Cristophersen 1948)としてある。たとえ第一言語が強い情緒的絆を感じさせるものであっても、それが自身の現在と将来を支える力を失えば、使用の機会は減少し、おのずと能力的衰退を招く。その一方で、たとえ実用的に必要なと頭ではわかっている、自身の言語能力(第一言語)に衰退を感じたとき(「ことばが出てこなかった」)、彼女たちは、ことばとの距離感を感じ(「自分のことばとが遠くなった気がした」)、自分のどこかが「崩れていく」/「零れていく」ように感じ、存在の不安に駆られたという。本研究の若い複言語話者の語りからは、Skutnabb-Kangas (1981)が母語定義の複数の基準として提唱する、能力(感)・実用機能・情緒的絆がそれぞれ個別の基準として意味をもつ一方で、Grosjean (2008)が「ホリスティックな」(Grosjean 2008: 9)視点から指摘するように、それらの基準ではかられる言語の価値が相互に関連し合い、総体として彼女たちの言語アイデンティティの基盤となっていることもうかがえた。

そのなかで英語が、彼女たちのなかで占める位置づけは独自である。少なくとも現時点で、英語は、実用的にも能力的にも彼女たちの第一言語や日本語と比較して「優位」(Weinreich 1976)にあるわけではない。情緒的絆という面ではなおさらである。にも関わらず、むしろそのような絆や家族からの「期待」から自由であることが、英語を彼女たちにとって特別なものとしている。そして MAI も AMI も、自身の現在とこれからを支える(言語)アイデンティティの基盤として、各々の第一言語でもなく、少なくとも彼女たちが現在暮らす日本語でもなく、英語を指定した。MAI にとって英語は、自身の「弱い」第一言語に代わる新たな「アイデンティティの基盤」としての位置づけである。また MAI からも言及されたことであるが、特に AMI にとって英語は、モラトリアムの言語、あるいは不確定な未来の担保というべき存在として位置づけられている。そこには、日本社会における言語ヒエラルキー構造と、国際社会における世界的共通語としての機能が背景としてあるが、彼女たちが今まさに自身の将来を模索する年齢にある、ということも関係している。

本研究の 2 人の若い複言語話者は、「移動する子ども」として「空間を移動」し、「言語を移動」(川上 2013: 3)してきた。さらに日本では学校や地域社会、自宅で、と言語を切り替えることで周囲との距離感を図り、自身の立ち位置のバランスをとって暮らしてきた。民族集団として一括りされる「エスニック・アイデンティティ」からの解放を求めつつ、マジョリティに同化するのではなく、境界に生きることに、「集団アイデンティティ」からの解放と、「個人アイデンティティ」の獲得の可能性を見い出そうとしている。その意味で、文化的しがらみから解放された世界言語としての英語は、そのような「個」としての生き方を模索する若者の「個人的・言語アイデンティティ」の基盤として、少なくとも現在、最も「しっくりくる言語」なのかもしれない。